

統合漢字の性格を見るための意味コード付けの試み

— 常用漢字を例にして —

林 邦 立 萍

0 はじめに

統合漢字は、国際規格ISO/IEC 10646:1993に収められた漢字である(注1)。この国際規格は、一つの計算機において多言語を処理できるという需要に答えた成果の一つである。統合漢字については、漢字の同定(典拠不明)や字体の不一致、異体字の問題、字種・字数不足などといった問題(注2)に関して、国語学者から、数多くの問題点が指摘されている。そういった問題の原因は、固定的かつ有限なコード化文字集合に無限といってよいほど膨大な量のある漢字を収めることにあろう。これらの問題に関しては、筆者は、漢字ソースで対応してはどうか、と考えている。その一方、統合漢字の漢字ソースの作成に従い、字体によって層別された各層において、どんな分野の字が集まっているのか、という意味的性格をどう帯びているのかが興味深い問題である。

漢字は、表意文字と言われ、しばしば表語文字とも言われる。これは、漢字がことばの意味単位と対応して語を表すためのものであることと深く関連しているからであると思われる。漢字は、中国、台湾、日本、韓国の四カ国の共通する文字である。とは言っても、それぞれの言語における発音はもちろん、意味の面でも必ずしも共通するとは限らない。これは、その文字が表すその語の使用は、民族の習慣や文化と無関係ではいられないからである。

そのため、筆者は、漢字が日本語においてどんな意味を表すかという観点から統合漢字の性格を明らかにしたいと思う。具体的な方法としては、意味を数値化して考察することを可能にした「意味構造分析」(注3)を視野に入れ、統合漢字の一字一字に『分類語彙表』(国立国語研究所編)の意味コードを付け、それぞれどんな意味分野の字であるかを明らかにするという分析法である。当然この方法も中国語、韓国語に応

用できると考えられる。本稿では、文字はどんな言語機能を担うか、そして、日本における漢字はどのような言語単位と対応するかを検討しながら、統合漢字の性格を見るための分析法を提示し、常用漢字を一つのモデルとして取りあげる。これによって今後、統合漢字の意味的な性格を明らかにする際の分析法ともなるであろう。

1 文字は意味コードをつける対象としての資格をもっているか

漢字一字一字にコードを付けるにあたっては、まず、次の2点が問われる。一つは、文字は意味コード付けの対象であるか、もう一つは、文字とは何か、という問題である。以下、この問題について考えてみたいと思う。

意味コードをつける対象は何であるか。そして、文字は意味コードをつける対象としての資格を持っているか。

『分類語彙表』(1990)のまえがきには、

「ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表し得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。…」

とある。これは、意味コードをつける対象の答えとして求められるであろう。言い換えれば、意味コードをつける対象は言語である。言語でなければ、意味コードをつける対象とはならない、ということである。

文字は何を表すものであるか。そして、言語における文字の位置をどう考えるのか。意味コードをつける対象としての資格を持っているか。

現代言語学理論の出発点とされているソシュール流によると、言語の研究対象と重点は文字ではなく、音声のほうに置かれていると言われる。これは、言語が音声と意味との結合したものであるという考え方が理論的根拠を与えるものだというわけである。そのため、文字は、言語から派生した副次的体系と看做され、言語ではないという扱いを受けることになった。当然、この考え方は西洋の言語における表音文字体系から出発したものであることはいままでもないことである。

しかし、文字の機能、特に漢字を考えようとする場合には、この定義ではいささか不都合な点が生じると思われる。これについては、早くも山田孝雄氏、或は時枝誠記氏などで代表される文字観から伺われる。山田1937は、

「文字の本質といふものは何であるか（略）その本質と考へらるゝものには、

一、文字は思想、観念の視覚的、形象的の記號である。

二、文字は思想、観念の記號として一面、言語を代表する。

三、文字は社会共通の約束によって成立し、又その約束によって生命を保つものである。

以上、三の要點が今日の文字の本質をなす要素であつて、この三要點を具有するところが、文字といふものの本質である。」

（『国語史 文字篇』）

と述べ、文字は思想（概念）と直接結びつくものだとする。文字は思想を直接表すものである。一方、時枝誠記1955の言語過程説には、次のような言及がある。

「言語は、思想の表現であり、また、理解である。思想の表現過程及び理解過程そのものが、言語である。（略）言語は、音声（発音行為）或は文字（記載行為）を媒介とする表現過程である。同時に、音声（聴取行為）或は文字（読字行為）を媒介とする理解過程である。」

（『国語学原論』）

この考え方に従うと、意味は、一方で音声と連合して音声言語となり、一方で、文字と連合して文字言語となつて、音声言語と文字言語が同じレベルに並ぶことになる。

これについて、森岡1968は、「時枝博士が音声のみを優先的に扱わず、音声と並んで文字も言語の一過程として位置付けていることは注意すべきであろう。」と述べ、文字を言語の一部とみ、西洋言語学の方法によって

「文字は、言語の一要素であつて、能記としての機能を果たし、一種の形態素としての性格をもっている。」

と理論化して、「文字形態素論」を提唱した。

このように、言語における文字、特に漢字は、言語を記録する道具である一方、意味と結合して、音声と並べて、言語の一要素であるとみることができる。このような考え方は、早くに先学から指摘されていた。それゆゑ、文字は、意味コードを付ける対象としての資格をもっていると考えられる。

2 日本語における漢字はどのような言語単位と対応するか

文字が表すその語の使用は、その民族習慣や文化と深く関わっている。文字が表すその語はどんな言語単位と対応するかが言語によって異なるであろう。これに関しては、西田龍雄1981は、

「文字とは、特定の言葉の世界で作られた形式（フォーム）を、その形式とある関連のもとに記録する記号であって、言葉の形式の単位、つまり意味の単位また音素の単位と一定の関係を持たなければならない」

「世界の文字」（講座言語第5巻）

と文字の定義について言及した。その意味では、文字は、ことばのある単位と対応し、そしてそのことばの世界にある概念を表す記号である。言い換えれば、見た目では同一文字であっても、違った言葉の世界で対応した意味の単位或は発音の単位は必ずしも同じではない。例えば、同じ「机」という漢字は、中国語では、/ji/と発音し、「機」の簡体字、「機械」の意味で、日本語では、/tukue/か/ki/と発音し、「つくえ」の意味で使われる。では、もともと古代中国語の単音節、孤立語の性質に合わせるために作られた漢字は、日本語においてどのような言語単位と対応するか。

日本語において漢字によって表される言語単位は、大別して音と訓との二種類が考えられる。音は、おおまかであれば漢字の中国語音を日本語化したものであり、漢音、呉音、唐音、唐宋音その他という区別がある。しかし、これは、中国語のいろいろの地域のいろんな時代の発音を日本語の音韻体系に合わせて発音した結果であり、その字の表す意味は、あまり変らない。例えば、「下」は、漢音「カ」と読んでも、呉音「ゲ」と読んでも、同じく「した」の意味を表す。

訓は、漢字によって中国語の意味に対応する日本語が慣習的に結合したものである。基本的には、日本語を漢字の意味に当てた結果である。ところで、日本語と中国語とは、もともと語彙体系が異なるため、その対応が、いわば必然的に一字多訓、異字同訓という関係が生じてくるわけである。例ば、

一字多訓：「高」：たかい（位置、年齢、身分、価格）（形容詞）

たかまる（動詞）

たかめる（動詞）

：相手の敬意を表すことば（「高配」など）

分量、程度、物価のあがること。

同訓異字：「たかい」：「高」「隆」「崇」「尚」「兀」「亢」「屹」

「危」…20字にも及んでいる。（『大漢語林』による）

このように、漢字一字の表す意味内容は単一であるとは限らないし、漢字と訓との関係もかならずしも一対一ではなく、むしろ一字が複数の訓を持ち、或は同じ訓を持つ字が複数ある場合が多い。

また、訓だけあって音を持たない字例もあれば、音のみあって訓がないという字例もある。例えば、現在の国語施策の一つである常用漢字表（1981年、1945字）に限ってみると、峠、畑、扱、…などは、前者の例であり、日本で成立した国字が大半である。逆に、音のみあって訓がないという字例は胃、腸、脳…などがある。これは、ほとんど本来日本語にない概念を表す漢字である。

以上のように、日本語における漢字は、音と訓という言語単位と対応している。そしてそれぞれが複雑な内容を保ちながら関連し合っていて錯綜した様相を表している。これがまさに日本における漢字の使用の一大特色だということは周知である。

3 漢字と形態素

漢字は、かなと違って、容易にある形態素を想起させる。これは、字義が漢字の本質である点と関連していると思われる。

日本語において、漢字によって表される言語単位には音と訓との二つがあることを2で確認した。しかしながら、音と訓とは形態素という言語単位とどういう関係を成しているのか。

漢字は一字一字が有意味であるところから一字一字の漢字は日本語の形態素として資格をもつものが多い。特に、同音異義語においては、漢字が意味の弁別の面に大きな役割を果たしているという点から、漢字は日本語の形態素としての資格を持つことを否定できない。しかし、膨大な量のある漢字には、音だけを持つタイプもあるし、訓しか持たないタイプ或は音、訓両方とも持つタイプの漢字もある。言語単位との対応は一樣ではない。それにしても漢字一字一字は、みな同じ形態素としての資格を持っているのであろうか。これについては、森岡1968, 1984, 1997において、非常に詳しく分析されている。氏は、

「日本語の形態素の資格をもつとはいってもそこには自ら限度がある

だけでなく、日本語の形態素として安定しているものから、不安定なものに至るまで種々の層が認められる。」

と述べ、そして、形態素としての安定の度合いによって日本語の漢字を次のように分類している。

a. 音訓両用の漢字：

花 夏 家 荷 火 下 海 河 革 額 間 管…

b. 字音専用で自立する一字漢字

句 訓 絵 気 客 芸 券 菊 菌 刑 碁 紺…

c. 派生語基を造る字音専用の漢字

(お)嬢(さん) 貴(様) (ご)飯 関(す)…

d. 熟語の要素としてのみ用いる字音専用の漢字

個 債 協 吏 員 央 婚 宇 師 庁 循 抵…

e. 日本語の形態素としての資格のない漢字

挨 拶 芭 蕉 麒 珈 齟 齬 袈 裟…

形態素としての安定度の順は、a→eとしている。つまり字音語としての形態素、字音形態素には非常に独立性の強いものから、一方においては、「仮借」や「当て字」に近いものまで、さまざまなレベルがあって、必ずしも形態素としての自立性という点では一様ではない。

以上の分類に対する反論(宮島 1981)があるものの、漢字はやはりある程度形態素と対応していると考えられる。

4 漢字のどの側面にコードをつけるべきか

日本における漢字の多くは音と訓を持ちながら、形態素と対応していると考えられる。しかし、漢字に意味コードを付ける際に、漢字のどの側面に付けるべきか。

語に意味コードを付ける方針については、田島1997は、以下のように述べている。

「すなわち、語に対するコード付けは、決して文脈によって行うのではなく、その語のもつ可能性によって行うということである。その意味では、上記の個別語彙の多義語の扱いは例外的なものである。

ただ、規範語彙といっても、それが先験的に存在するものではなく、個別語彙からの帰納に基づくものであるから、文脈でどうなってい

るかをもとに考えるのではなく、どういう意味を担えるかその可能性を中心に考えると言うことである。」

その考え方に従うと、漢字に意味コードをつける際に、漢字がどういう意味を担えるかその可能性を中心に考えなければならない。

しかし、漢字がどういう意味を担えるか、という問題は実は簡単なことではない。漢字の訓は、明らかに形態素と対応していると言えるものの、音は、形態素との結合度合いによって強いものからあいまいなものまで、一様ではない。また、一つの漢字は、場合によって複数の意味を喚起し得るという多義語の問題も絡んでいる。そのため、それぞれの漢字が表すあらゆる意味を網羅的につかむのは、とても簡単なことではない。まして、漢字のあらゆる側面に意味コードをつけるのは、困難であると思われる。

漢字の訓は、過去の日本人が個々の漢字の字義に対応すると考えて当てた和語である。訓の定着には、かなりの時間が必要だろうと思われる。しかも、必ずしも固定したものではなく、時代によって変化することもわかった。また、一つの漢字に一つの訓があるとは限らず、複数個の訓を持つものもある。しかし、大勢としては、固定化および一字一訓への方向をたどっているとみることができよう。

そのため、筆者は、漢字が表し得る意味の一側面を定訓に、漢字に意味コードを付け、統合漢字の意味的性格を客観的に分析することを試みようとするのである。一字一字漢字の定訓の推定については、峰岸1984c、田島1986bが言及したように、簡単なことではない。峰岸氏1984cは、

「一見漢字の定訓に関する記述は容易のようである。併しながら、それらは、漢字とその和訓を示したものではあっても、直ちにその定訓について記したものは必ずしも言えないのである。寧ろ、そのような定訓に関する直接的記事を含む文献を求めることは、極めて困難なことであろう。」

と、田島氏1986bは、

「漢字の常用和訓（定訓）がいかなるものであるかについては、難問がある。定訓の考証のためにいろいろの工夫がなされている。」

と述べた。そして、その定訓を推定するための作業については、山田俊雄1971、峰岸明1984a、1984b、1984c、田島毓堂1986aなどの先学の論考からさらに工夫

する必要があると見られる。それにしても、辞書・字書などは定訓の推定の典拠として有効な手がかりとなるであろう。

5 一つのモデル — 常用漢字を例にして —

「常用漢字」は現在日本で行われている国語施策の一つである。これは「当用漢字」(1946年、1,850字)の制限色をやわらげた漢字使用の目安である。この点では、情報交換と情報処理のための規格としての統合化漢字とは性格を異にしているが、統合漢字の一部として見るのは差し支えなからう。そのため、前項で述べた定訓の考え(注4)を念頭に、統合漢字の性格を分析するための試みの一段階として常用漢字を取りあげることにした。

個々の漢字に意味コードを付けるための資料としては、広く語彙研究者に利用されている『分類語彙表』に基づいた、『分類語彙表』は、現在、コードの新設と改訂の検討がなされている。そのため、各意味分野のコードについては、昭和39年の版を利用した。当然、すでに指摘された部分的な構成要素が無視されるという複合語などの問題がそのまま含まれている。しかし、本稿では、一字一字の漢字がどのような意味範疇を表し得るかという性格を見ようとすることを目的であるため、これらの問題は他論に譲って特に問題としない。一方、擬定訓の推定のための字書としては、『大漢語林』(1992、大修館)を選定した。『大漢語林』は、JIS漢字(第1、2水準、補助漢字)のすべてに区点番号が施されているはじめての中型漢和字典である。見出し漢字が、13,950字あり、時代の情報化に答えた辞書としてみてもよからう。

統合漢字の意味的性格を見るための意味コード付けには、一字一字の漢字の表す意味を定訓と取りあげていかどうか、そして定訓をそのまま語の単位として意味コードを付けられるかどうか、また、定訓推定のために依拠した字書の性格、意味を範疇化したコードを付する資料の選定など、それぞれテーマとして論じる余地があろう。さしあたり、試みの段階では、常用漢字を対象に意味コードを付けることにした。例を取って説明すれば、例えば、「亜」という漢字の意味コードは、擬定訓「つく」によって『分類語彙表』2.16のコードで、1d時間・位置の小項目に分類した。ただし、このように推定し得た各漢字の擬定訓は、常用漢字訓(注5)と一致するとは限らない。その場合の意味コードは、『大漢語林』に

よって付ける。例えば、「駅」という漢字の擬似定訓は「つぎうま」と推定されたが、常用漢字訓「うまや」と一致していない。この場合、「駅」の意味コードは、擬似定訓「つぎうま」によって1.561のコードで.5d動物の小項目に入れた。以下は、参考として常用漢字を一つのモデルと見、それぞれがいかなる意味分野と対応しているかについて試みた分析結果である。各意味範疇の名前は、基本的に『分類語彙表』に従うが、小項目は、先学阪倉1960、浅見1971、田島1995の分類を参考した。

.1 抽象的關係（人間や自然のあり方のわく組み）

.1a 本体・関係

何各質者品物事仮他類科級基元源本依因縁拋係就從循殉遵順隨陪由異違兼
差似肖像戻圀介含挾系交混劑錯雜担負包包浴絡累粹專然最是正善貞共均互
济斉相等同如番以且況但

.1b 存在・様相

幾兆鼎様趣性居在処存有隠現匿秘興成遺殘失消尽亡滅棄捨除廢払具欠整全
調備乱該克適緊張障奇希虚珍不無難殊妙悪佳可宜義吉凶好那寂優良安危敵
康妥泰寧

.1c 力・変化

勢力能化直航涉渡周泌被拳抗揚派遁迭変易改換替代質終絶断罷了繼嗣紹接
統動回揮週巡振震旋轉般播止駐停届留起立傾倒反覆弊翻掛揭懸弦構支措置
釣提敷浸潜漬投埋移越冲格及経至遷送速超到発歴逸驅爆飛漂流過貫達通徹
逐追逃却進斥退往還去行征撤赴復返来出凸入容込納拔酌漏陥降昇垂墮注墜
登騰落卸騎載乘駛沈搭浮没解協合積組融隔岐距件散判班頒俵分別弁開啓拓
披閉括結疊盛積層締縛復約群集屯募將帥副率寄触即迫付附隸放離叙陳添併
並列連敗擊拷打抵当排拍伐批妨撲压尉引援押控刷擦抄衝推抽突摩抹抑遮窒
防卷糾曲屈絞搾折凹壞害割刊掘刻碎裁削刺製析切創挿賊彫破敗崩剖益加減
実充剩殖増損満耗余濫延演縮伸展拡脹膨衰威強劇激剛酷弱壯武烈

.1d 時間・位置

暇期時夏秋春冬歳年月旬晝宵朝晩夜夕翌今古昨昔第涯始初緒先后前位
所点座跡界境区畔横斜縦方西東南北右左下隅上中頂表裏間季端末外内奥底
隣際側辺傍岬亜後更次滯遅暮沿逆向倍非伏偏臨恒暫常頻秩每又既再序漸未

予久寿早稚幼旧故新

.1e 形・量・数

形状状態円丸渦球玉珠粒穴坑孔銃洞壩彰紋束裂梓軌幅一耄億乙九五午甲三
參四七十申千双単二式八百万兩六員箇斤個尺丈鍾寸畝隻段斗匹枚匆秒乏
尖皆升半普遍郡諸隊片程偉英画究窮極傑限秀俊補劣銳滑緩險崎準阻困鈍
平暴利永遠寬急狹近高深崇淺卓短長低博漫悠隆巨厚細小大薄輕重徐迅速敏
寡衆庶少多豊裕独完概凡甚太

.2 人間活動の主体

.2a 個人・人間

我私朕彼某僕己自人丁女男郎翁嬢祖胎童婆娘

.2b 神仏・精霊

鬼魂社神仙仏魔魅靈

.2c 家族・仲間

氏姓属族妻妃夫婦婿父母孤子兒孫嫡姪兄昆姉仲弟胞妹叔曹敵輩伴友倫客主
賓

.2d 階級・職業

蛮兵王皇帝藩侍臣虜仕医僧尼宰吏僚寮匠卒奴兵伯

.2e 社会・機関

公郷里国邦京郊村都党坊郵街唐場陣校寺宗市店厘関官局司庁師

.3 人間活動—精神および行為

.3a 感情・意志

意気心夢愛禁情孝声努志罪信真誠忠衷徳罰癖慮域擬権衡旨証儒款規憲式則
度範法律術感狂慘寝睡醉痛疲飽眠慰悦嚇患歛喜恐脅驚虞慶娛慌困愁懲怒惱
煩悵憤愉憂哀慨憾忌敬嫌恨慈仁憎悼悔慕恋泣笑笑嘆嗚堪耐忍励劳賀悔願祈
願祝尚待奮望欲恭謹謙誇肅辱慎恥覚学慣効修習做忘理憶懐勘疑悟考肯察思
識審想諾知認念紛惑選択比闊計検査算試諮尋数搜測探訂評謀料量決占定迷
劫謝謝企図閔監看観仰見視省診眺督覽示候伺聴偵聞問哲朗快苦寂悲惜親愚
賢聖疎痴巧拙怪確詳精必若否唯

.3b 言動・創作

詞辞河君吳江題名命句字驗璽標話史章籍典文冊詔勅譜曆歌詩例絵塑楽詠吹

喚吟呼召唱謠議叫言号伝黙訳応語講告述説宣対談答論記誌書銘録読写奏著
膳描

.3c 風俗・社会

俗禍幸災祉祥福厄宴姻婚斎狩旅獵棋技芸碁射徒士儀業俳勲功休勤懇据惰怠
働勉慢務住宿粧食装脱着泊嫁婦祭葬泳戯跳舞躍遊踊騒拘囚瞬拜擁踐走踏歩
奔掘操振執拾操摘把飲喫吸吹吐噴為營遣催遂致犯雅貴尊卑忙潔妄廉朴頑儉
穩勇敢

.3d 交際・支配

媒軍勝政恩惠喪礼会遇迎招遣弔徵使訪誘拒許契獄赦准訟誓訴盟術競護攻守
襲侵戦争挑討闘避保冒免紀治職總統部略領雇賃教矯訓導諭養救佐贊助扶求
需請要頼委勸奨囑薦促託呈任令酬責報戒喝詰刑警唆称賞褒誉拐偽欺虐詐懇
篤

.3e 経済・業務

税租株金資銭匱冗値俸幣債役扱獲携採持取収撰窃奪畜蓄貯盜得賦捕費購商
買売販課給享献貢施賜受授署承讓禪贈配奉与借償貸賒預榮富稼穫刈漁耕墾
栽銅植農培建醸績績鍛築鑄紡運搬輸煮炊洗掃濯編縫供飾設繕研塗磨練鍊御
使庸用工作制造貧

.4 人間活動の生産物—結果および道具

.4a 物品・資材

犠牲紙網材陶板薪炭油較管軸筒舗棒輪栓策柄型模維綱鎖索網網羅

.4b 衣料・装身具

緯革糸純線織綿絹布褐服衣襟冠帽紳帶靴履傘盾環

.4c 食料

糧飯穀米塩酢糖酒茶酪菜

.4d 住居・道具

屋家郭館宮舍城菓莊宅塚邸墳墓陵壘閣庫広塾倉蔵亭殿塔堂府楼院階垣園塀
陸門室房廊宇軒床礎窓柱棧閣壁欄架台棚壇封戸柩席帳扉幕案机窯炉貨財宝
賄器錠豆缶皿鉢盤瓶盆槽棺箱袋勺爵杯印筆墨針扇劍刀弓弧彈砲矛矢琴鼓
鐘笛鈴偶旗侯の碑筒券札版票符簿

.4e 造営物

灯鑑鏡械機車艦舟船艇舶帆園町庭廷田畑牧橋径棧途道路井港溝池津堤

5 自然—自然物および自然現象

5a 刺激

陰影景幻光電黃玄紅黒紺彩紫朱色青赤素丹白緑韻音轄香酸味映輝透翳曜汚
染響鎮薰凝澄濁粘暗顯昭晶鮮淡微明幽醜美麗靜密滝臭芳甘渋辛堅固硬柔淨
清軟濃

5b 天地・現象

液粉鉛銀鈹銑鉄銅硫煙塊灰岩砂硝礮壤石地泥土汽雰霧水霜滴湯泡露洪雷風
雲雨雪零潮波浪凍炎火空宙天漢星日陽岳丘峽溪原坂山谷坪岬峰野陸瀉湖沼
瀨川泉沢浦海岸州島浜洋灣森漠林乾干湿潤燥荒照晴曇和水浴燒焦蒸熱沸温
寒閑暑暖熱涼冷

5c 植物

醇雌特毒雄果菜芝樹草木稻芋荷菊菌桑椹漆松杉藻桃梅麦麻柳花華菓芽核幹
莖稿根才枝種条節竹苗穂葉

5d 動物

駅猿牛鯨犬豪獸象豚猫馬猛猶羊鷄鳥蛇魚蚊蚩蚕虫菌貝竜

5e 人体・生命

身体裸額眼顔口項耳首唇舌頭鼻面目胸肩腰乳背尾腹脚指肢手掌足翼腕胃肝
筋臟胆腸胴肉脳肺膜羽肌髮皮膚毛殻角骨齒髓汗血脂尿涙卵老息脈傷疫疾症
痘病痾育活産滋熟生誕繁肥肪茂枯殺死逝餓渴飢朽娠妊腐癒療健盲齡

以上は、常用漢字を一つのモデルとし、統合漢字の意味的性格を見るための分析法によって試みた分析結果である。その結果により、常用漢字には、.1「抽象的關係」の意味分野を表す漢字が一番多く占めているのに対し、.2の「人間活動の主体」が一番すくないということがわかった。小項目別に見れば、.1cの「力・変化」分野の漢字は、全体で一番多くを占め、.3a「感情・意志」が次ぎ、.2b「神仏・精霊」が一番少ないということになる。

6 むすびにかえて

統合漢字についての是非については賛否両論があり、特に、どんな意味的性格を帯びているのが興味深い問題である。そのため、筆者は、本稿を通して語彙論の立場

から、統合漢字の意味的性格を明らかにするための分析方法を提示しようとした。

漢字は言語を記録する道具である一方、意味と結合して言語の一要素であると思えることができる。これは、漢字の本質がその字義と無関係ではいられないからである。日本語における漢字は、音と訓という言語単位と対応しながら、一つの形態素に相当するとも考えられる。これは、漢字の一字一字が常に一定の意味を表していることと深く関わっているからである。しかし、漢字に意味コードを付けるあたって一字一字の漢字がそのままコード付けの単位となるかどうかという問題は、語彙論の見地からまだ検討する余地があろうが、検討は他日に譲る。

unicodeを採用した統合漢字は、JIS×0221規格に取り入れられ、1995年1月1日の日付で公刊された。そして、それをサポートしたソフトもいくつか製品化された（注6）。この規格の製品化やJIS化につれ、この規格は、計算機環境の国際化をさらに一段と進ませたとみられるであろう。

注

- 注1. 統合漢字は、unicodeのはほぼ全部を採用し、中国、台湾、日本、韓国の漢字を字形類似の程度によってソースコード54,015字から20,902の漢字群に統合された。それゆえ、「Unified-Kanji」或は「Han-Unification」と呼ばれ、日本語に「統合漢字」或は「統合化漢字」と訳された。
- 注2. 統合漢字の問題点については、拙論「統合化漢字研究序説—『大漢語林』版漢字シソーラス構想」（1995）を参照されたい。
- 注3. 「意味構造分析」は、阪倉氏(1960)によって始めた語彙分析法である。具体的には、語彙を形成する各単語に対応すると見られる語の意味番号を与え、語彙を意味分野別に分けてみる方法である
- 注4. 『大漢語林』によって推定した各字の定訓を便宜的に擬似定訓と称する。
- 注5. 常用漢字表で定められた各漢字の訓を便宜的に常用漢字訓と称する。
- 注6. JIS X0221規格の全名は、「JIS X 0221:1995 国際符号化文字集合（UCS）—第一部 体系及び基本多言語面」である。それと対応した製品は、マイクロ社の提供資料により、Windows NT、Office97（Access以外）Java、XKP、IME97、IE4.0、SQL7.0などがある。これらの製品のすべてはWindows NTというOSのサポートが必要であり、そのうち、IE4.0、SQL7.0が未発売のものである。（執筆時点）

参考文献

- 浅見 徹 1971 「古代の語彙Ⅱ」『講座国語史3 語彙史』大修館
- 阪倉 篤義 1960 「万葉集の構造—(その一) 名詞について—」『万葉』34号
- 田島 毓堂 1986 「常用漢字常用和訓—仮名資料としての源氏物語絵巻詞書における—」
『東海学園国語国文』30
- ” 1986 「漢字訓—和訓発生の契機としての」『語源探求』1
- ” 1992 「語彙論的語の単位試論—意味単位と分類単位—」
『日本語論2』和泉書院
- ” 1995 「源氏物語と絵巻詞書の語彙—比較語彙論的考察試案—」
『日本語論4 言語の変容』和泉書院
- ” 1996 「意味コード付けに関する諸問題」『開発・文化叢書14 国際開発研究フォーラム』名古屋大学大学院国際開発研究科
- 玉村 文郎 1993 「日本語における漢字—その特質と教育—」『日本語教育80号』
- 峰 岸明 1984a 「上代における漢字の定訓について」『横浜国大言語研究』2
- ” 1984b 「上代漢字定訓考証—『万葉集』を資料として—」『横浜国立大学人文紀要』第31輯
- ” 1984c 「平安時代における漢字の定訓について」『国語と国文学』
- 宮島 達夫 1981 「「文字形態素論」批判」『教育国語』
- 林 玉樹 1979 「日本語の表記法」『ことば』シリーズ10日本語の特色』文化庁
- 山田 俊雄 1971 「漢字の定訓についての試論—キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして—」
『成城国文学論集』四
- 拙 論 1995 「統合化漢字研究序説—『大漢語林』版漢字シソーラス構想—」
長野県ことばの会会誌『ことばの研究』第7号
- 田島 毓堂 1997 『開発・文化叢書21 比較語彙研究の試み』名古屋大学大学院国際開発研究科
- 時枝 誠記 1955 『国語学原論』岩波書店
- 水谷静夫等 1987 『文字・表記と語構成』朝倉書店
- 森岡 健二 1989 『文字の機能』明治書院
- 森岡健二等 1975 『日本語の文字 [シンポジウム] 日本語1』学生社
- 山田 孝雄 1937 『国語史文字篇』刀江書院
- J. カラー著川本茂雄訳 1992 『ソシュール』岩波書店

《参考資料》

- 鎌田正、米山寅太郎編 『大漢語林』1992.4 大修館書店
- 国立国語研究所編 『分類語彙表』1990

日本工業標準調査会 審議 『国際符号化文字集合 (UCS) —第 1 部 体系及び基本
多言語面 JIS X 0221-1995(ISO/IEC 10646-1:1993)』

平成 7 年 1 月 1 日 制定 日本規格協会 発行

”ISO/IEC 10646-1 Information Technology-Universal Multiple Octet Coded
Character Set (UCS)-Part1 Architecture and Basic Mult-lingual Plane”

1993.5 ISO/IEC

(名古屋大学大学院博士課程後期)